

留萌いま・むかし



ふたたび

最終回

福士 広志

館長とふるさとの
係長と芸学

ふくし・ひろし
昭和28年生まれ。41才。
同58年留萌市役所入庁。
同60年より本稿執筆

留萌の黄金時代はいつだったか？
これに答える人が何人いようか。
留萌の有史以来の長い歴史の中で、
黄金時代と呼べるのは二度あった
と考えられる。

まず、一つは江戸時代の中頃の

ことであろう。当時留萌はル、モツ
ペと呼ばれ、留萌南部のアイヌの
人たちの中でも有力な指導者が彼
等を指導していた時である。安政
年間にル、モツペを訪れた松浦武
四郎はル、モツペに蝦夷地の中で

も有力な名家があると記している。
そして、古くはその家系を追うこ
とはできないがことわりながら、
次のような系図を記している。

- 一 天明年間惣乙名
- 二 イマウカシテ
- 三 コタンヒル
- 四 ヒシヨラシ
- 五 トヒラクアイノ
- 六 ヲタトシ

このうちのイマウカシテとコタ
ンヒルの時代が全盛期であった。
イマウカシテは百畳敷きの家に住
んでいたし、コタンヒルはご存じ
のとおり、豪華な山丹服を着てお
り、妻と娘は銀製の首飾りを下げ
ていたと伝えられる。彼等が活発
に大陸と行き来をしていた証拠で
ある。ダイナミックな行動力が伺
える。

もう一時期は、明治に入ってから、
留萌築港及び留萌の基礎作り
に留萌人が奔走した時代であった。
彼等は留萌にこだわらず広く情報
収集に勤め、留萌百年の大計を立
て、そのために奔走したアイデア
と実行力を兼ね備えた人たちであっ
た。五十嵐億太郎がその代表であ
ることには変わりはないが、彼だ
けの力だけではなしえなかったこ
となのである。多くの留萌の住民

が億太郎と意識を共有し、参画し
たことにより成し遂げられたので
ある。留萌は留萌だけの繁栄をす
ることはできない。彼等の考え方
は北海道全体、日本全体の繁栄が
留萌の繁栄であると考えていた。
彼等は留萌人であり、北海道人であ
り、また日本人であったのである。

このダイナミックな歴史をわが
留萌の市民は誇りにし、彼等の企
画力と実行力に学びこれからの留
萌を築かねばならない。

長い間、留萌の歴史のひとつま
を書き綴ってきたが、これからの
留萌を考える上で、留萌人の辿っ
てきた道の中にこれからの留萌を
考えるヒントが隠されているのか
もしれない。温故知新。

「留萌いま・むかし」も連
載百回を数えるに至りました。
一応今回をもって最終回とさ
せていただきます。また、留
萌の新しい歴史の事実が掘り
起こされたときは筆をとろう
と考えています。長い間ご愛
読下さいました市民の皆様
に心から感謝申し上げます。

第三期黄金時代の到来を待つ留萌